

高校野球監督の指導理念について

島野 恵介 粟木 一博

キーワード：高校野球 指導理念 因子分析

Instructional belief of the current high school baseball coaches

Keisuke Shimano Kazuhiro Awaki

Abstract

The purpose of this study was to clarify how the supervisors see the trend and identify the problem of recent high school baseball, and also to clarify the structure of cognition toward the idea of the Instructional belief. In addition, it aimed to clarify how the structure of cognition was different according to their ages, school types, years of coaching, years of experience in baseball, and the results of the game.

Fifty-seven items of questionnaire which concerns the Instructional belief toward high school baseball were sent to the supervisor of 1411 high schools baseball clubs throughout the country.

As a result, eight factors which are F1 "Practice" and F2 "Communications" and F3 "Guidance and management" and F4 "Equality of opportunity" and F5 "Lifelong sports" and F6 "Principle of guidance" and F7 "Support" and F8 "Environment" were selected. A significant difference was seen in F1, F2, F3, and F5 in the items of the years of experience and the types of experience in sports. A significant difference was also seen in F1, F2, and F3 in the items of "type of school" and "highest game results. Similar result was also seen in items of the game result in the summer year 04" and the highest record of the head coach. The head coaches who went to national level games had higher scores and coaches who have never been to it had higher in F4 and F8.

Key words : high school baseball, instructional belief, factor analysis

I. 目的

数ある高校のスポーツの中でも注目を集めるものの一つとして高校野球がある。財団法人日本高等学校野球連盟に加盟している全国の硬式野球部は平成元年から

4,000校を超え、平成18年5月末の段階で4,242校にも上る。マスコミを始め高校野球に対する注目度は高く、指導に当たっている監督者は周囲からの期待、プレッシャーなどを受けていると推察できる。

本研究では高校野球の指導場面に焦点を当て、最近の高校野球の動向や問題点を監督者自身がどう捉えているかを明らかにするとともに指導者の指導に対する理念の認知構造を明らかにすることを目的とする。さらに、その認知構造が年齢、指導年数別、野球経験年数別、学校種別、競技成績などによってどのように異なるかを明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査対象

日本高等学校野球連盟に加盟している全国の高等学校硬式野球部の中からランダムに抽出した1,411校の硬式野球部監督を対象とした。

2. 調査期間

平成18年1月末から平成18年5月末までとした。

3. 調査内容

高校野球指導者がどのような指導理念を持ち、指導に当たっているのかを明らかにするために、質問紙を用いて調査を実施した。年齢、性別、指導年数、野球経験、学校区分、職種区分、指導実績等からなるフェイスシートを付け、指導者の指導理念に関わりがあると考えられる57項目の質問を記載し郵送法を用い送付した。質問項目の回答は、「とてもそう思う」、「そう思う」、「どちらでもない」、「そう思わない」、「まったくそう思わない」、からなる五件法を採用した。その他に「監督になった理由」、「現在の高校野球指導者(自身を含む)にとって最も大切なこと」、「これから高校野球指導者を目指す者に望むこと」を自由記述として回答を求めた。

回収数715通(50.7%)のうち、有効回答数709通(50.2%)であった。

III. 結果

1. 評定平均値での比較

評定平均値が最も高かった質問項目は質問16「高校野球において精神面の強化は必要であると思う」と、質問1「実践練習だけでなくチームミーティングも重要である」であった。

逆に低い値を示したのは質問32「練習内容よりも練習時間が大事である」が1.95であり、質問39「部員には学業よりも野球に専念してほしい」が2.08であった。

2. 因子分析

指導理念に関する57の質問項目を因子分析モデルによって検討した。その結果8因子を有意な因子として採用し、この基準バリマックス解を求めた。

第一の因子は質問26「投手力の強化には他のポジションよりも力を入れたいと思う」、質問17「気候による練

習量の差は何らかの方法で解消することが可能だと思う」、質問20「練習時間は練習内容でカバーすることができると思う」等の項目から構成される。これを「練習内容」因子と命名した。

第二の因子は質問53「野球に関すること以外でも部員の相談に乗っていると思う」、質問46「他校の監督と定期的に交流をはかっている方だと思う」、質問10「普段から選手とのコミュニケーションを心掛けていると思う」等の項目から構成される。これを「コミュニケーション」因子と命名した。

第三の因子は質問52「部員は合宿生活が望ましい」、質問48「指導場面において殴ることもやむを得ない場合があると思う」、質問33「有力な選手には学区外であっても入部してもらいたい」、質問23「本人が望むなら越境入学に問題はないと思う」、質問42「積極的に自分自身がスカウト活動を行いたい」等の項目から構成される。これを「指導・管理」因子と命名した。

第四の因子は質問8「希望者がいれば女子生徒も部員として受け入れたい」、質問38「女子選手の公式戦出場を認めるべきである」、質問56「部内に女子選手がいたとしても男子同様に指導すると思う」等の項目から構成される。これを「全員参加・機会均等」因子と命名した。

第五の因子は質問6「卒業後も部員たちには野球を続けてほしい」、質問55「卒業後も部員たちには野球に関わっていてほしい」等の3つの項目から構成される。これを「生涯スポーツ」因子と命名した。

第六の因子は質問50「高校野球において「犠牲バント」は重要であると思う」、質問29「攻撃力よりも守備力を重視したいと思う」、質問54「部員には学生野球憲章を遵守するように指導することは重要だと思う」等の項目から構成される。これを「指導方針」因子と命名した。

第七の因子は質問22「保護者からの強いプレッシャーを感じる」、質問34「OB・後援会からの強いプレッシャーを感じる」の2つの項目から構成される。これを「サポート」因子と命名した。

第八の因子は質問5「部の活動費が足りないと感じる」、質問28「自分の高校の練習施設は不十分であると思う」、質問4「ウエイトトレーニングは積極的に行った方がよい」の3つの項目から構成される。これを「活動環境」因子と命名した。

3. 因子得点の比較

1) 年齢による因子得点の比較

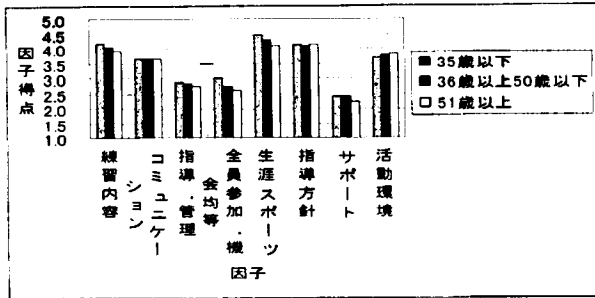


図1. 年齢による因子得点の比較

年齢における因子得点の差を比較するために因子ごとに一要因の分散分析を実施した。その結果、第一因子 ($F=9.11$, $df=2/706$, $p<0.001$)、第四因子 ($F=11.38$, $df=2/706$, $p<0.001$)、第五因子 ($F=15.80$, $df=2/706$, $p<0.001$) に有意な差が見られた。さらに多重比較を行った結果、第一因子においては、すべての年齢層の間に有意な差が見られ、第四因子においては、35歳以下のグループと36歳以上から50歳以下のグループ、35歳以下のグループと51歳以上のグループとの間に有意な差が見られた。第五因子においてもすべての年齢層の間に有意差が見られた。有意差が見られた因子において35歳以下が最も高い値を示しており、三因子とも最も若い年齢層から順に高い得点を示している。

2) 指導年数による因子得点の比較

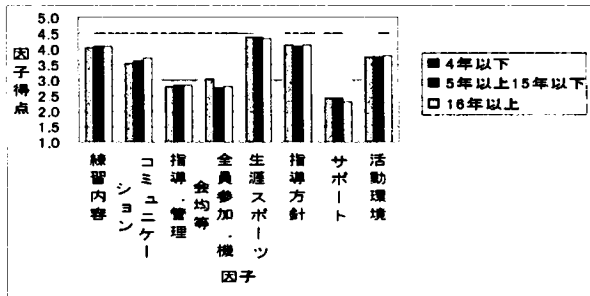


図2. 指導年数による因子得点の比較

指導年数における因子得点の差を比較するために因子ごとに一要因の分散分析を実施した。その結果、第二因子 ($F=4.41$, $df=2/706$, $p<0.05$) と第四因子 ($F=5.97$, $df=2/706$, $p<0.01$) に有意な差が見られた。さらに多重比較を行った結果、第二因子においては4年以下のグループと16年以上のグループに有意差が見られた。第四因子においては4年以下のグループと5年以上15年以下のグループ、4年以下のグループと16年以上のグループに有意差が見られ、指導年数4年以下の監督者が最も高い値を示した。

3) 野球経験年数による因子得点の比較

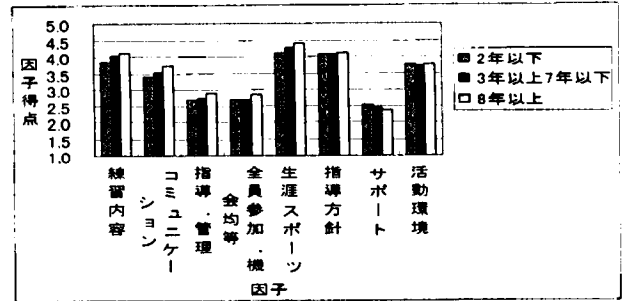


図3. 野球経験年数における因子得点の比較

野球経験年数における因子得点の差を比較するために因子ごとに一要因の分散分析を実施した。その結果、第一因子 ($F=9.12$, $df=2/706$, $p<0.001$)、第二因子 ($F=13.78$, $df=2/706$, $p<0.001$)、第三因子 ($F=9.07$, $df=2/706$, $p<0.001$)、第五因子 ($F=6.99$, $df=2/706$, $p<0.001$) に有意な差が見られた。

多重比較の結果は、野球の経験年数の長さが長くなるほど各因子得点が高くなる傾向を示している。

4) 学校区分による因子得点の比較

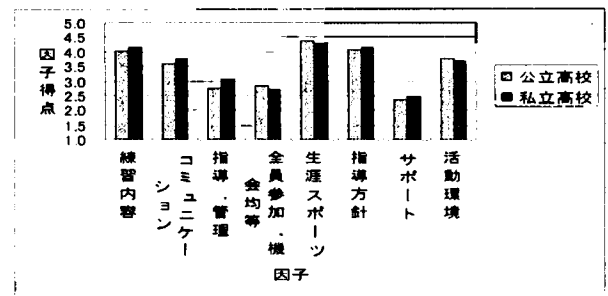


図4. 学校区分による因子得点の比較

学校区分における因子得点の差を比較するために因子ごとにt検定を行った。その結果有意な差が見られ、第一因子 ($t=-2.96$, $df=706$, $p<0.01$)、第二因子 ($t=-3.24$, $df=706$, $p<0.001$)、第三因子 ($t=-6.99$, $df=706$, $p<0.001$) 共に私立高校が公立高校より高い値を示した。

5) 職種区分による因子得点の比較

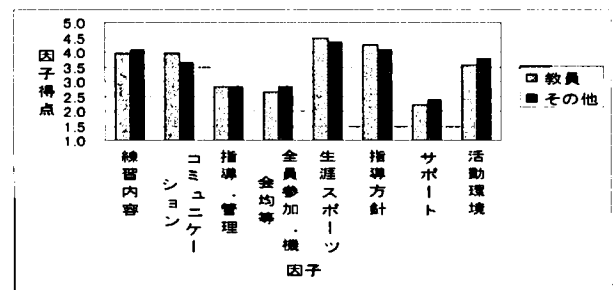


図5. 職種区分における因子得点の比較

職種区分における因子得点の差を比較するために因子ごとにt検定を行った。その結果、有意な差が見られ、第二因子において ($t=1.99, df=707, p<0.05$) 教員がその他の職業に比べて高い値を示した。

6) H16年夏季大会成績による因子得点の比較

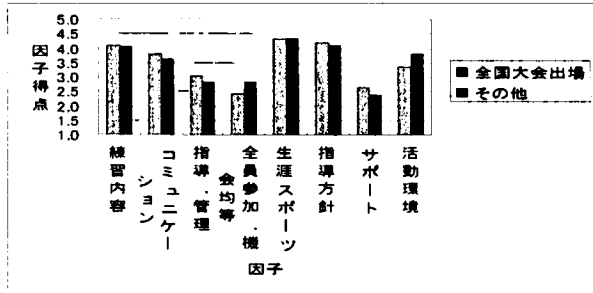


図6. H16年夏季大会成績による因子得点の比較

H16年夏季大会成績における因子得点の差を比較するために因子ごとにt検定を行った。その結果有意な差が見られ、第二因子 ($t=2.09, df=707, p<0.05$)、第三因子 ($t=2.74, df=707, p<0.01$) において、全国大会出場監督者は出場していない監督者より高い値を示した。第四因子 ($t=-3.59, df=707, p<0.001$)、第八因子においても有意差が見られ ($t=-3.77, df=707, p<0.001$) これは全国大会出場監督者よりも出場していない監督のほうが高い値を示した。

7) 監督最高成績による因子得点の比較

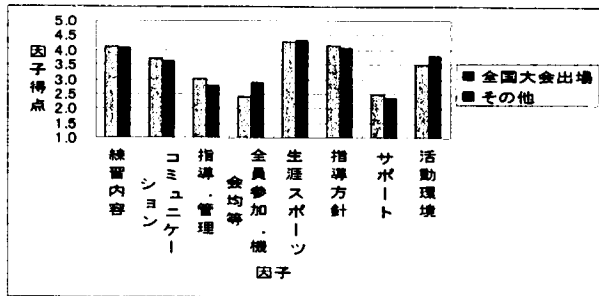


図7. 監督としての最高成績による因子得点の比較

監督最高成績における因子得点の差を比較するために因子ごとにt検定を行った。その結果有意な差が見られ、第二因子 ($t=2.23, df=707, p<0.05$)、第三因子において ($t=4.26, df=707, p<0.001$) 全国大会出場経験のある監督が全国大会出場経験のない監督より高い値を示した。第四因子 ($t=-6.46, df=707, p<0.001$)、第八因子において ($t=-4.08, df=707, p<0.001$) は全国大会出場経験のない監督が全国大会出場経験のある監督より高い値を示した。

8) 経験種目による因子得点の比較

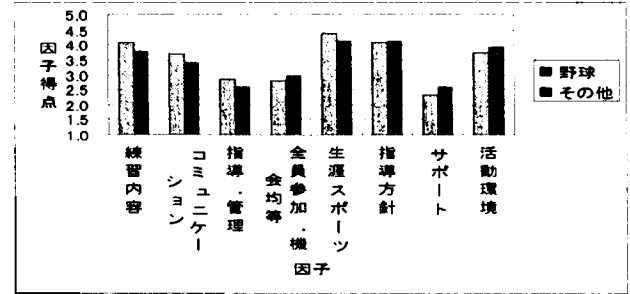


図8. 経験種目による因子得点の比較

経験種目における因子得点の差を比較するために因子ごとにt検定を行った。その結果有意な差が見られ、第一因子 ($t=4.19, df=499, p<0.001$)、第二因子 ($t=3.14, df=499, p<0.01$)、第三因子 ($t=2.54, df=35, p<0.05$)、第五因子 ($t=2.21, df=34, p<0.05$) 共に野球経験者の方が他種目経験者より高い値を示した。

9) 競技者時代の最高成績による因子得点の比較

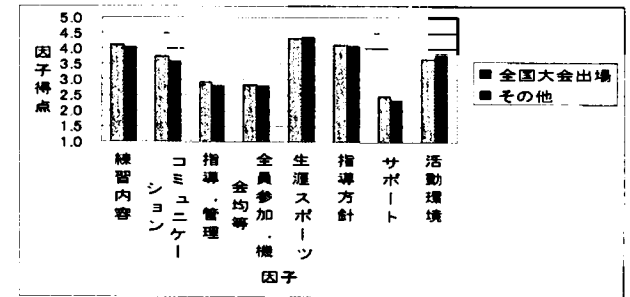


図9. 競技者時代の最高成績による因子得点の比較

競技者時代の最高成績における因子得点の差を比較するために因子ごとにt検定を行った。その結果、有意な差が見られ、第一因子 ($t=2.29, df=707, p<0.05$)、第二因子 ($t=3.36, df=707, p<0.001$)、第三因子 ($t=3.44, df=707, p<0.001$) 共に全国大会出場経験者が全国大会未経験者より高い値を示した。

4. 自由記述欄の回答

1) 監督になった理由・経緯についての分類

「監督になった理由・経緯」への自由記述を9つの項目に分類した。「無回答・特になし」や、少数派意見の「その他」を除くと分類項目は7項目となった。「野球が好き・続けたい」という内容の回答が一番多く、次に「校務」という内容が続いた。

2) 現在の高校野球指導者(自身を含む)にとって最も大切なことについての分類

「現在の高校野球指導者にとって最も大切なこと」への自由記述を10個の項目に分類した。「無回答・特になし」

や、少数派意見を「その他」を除くと分類項目は8項目となった。「人間形成・教育の一環」という内容の回答が一番多く、「野球が好き・情熱」、「自己向上」と続いた。

3) これから高校野球指導者を目指す者に望むことについての分類

「これから高校野球指導者を目指す者に望むこと」への自由記述を10個の項目に分類した。「無回答・特になし」や、少数派意見を「その他」を除くと分類項目は8項目となった。「人間形成・教育の一環」という内容の回答が一番多く、「自己向上」、「野球が好き・情熱」と続いた。

5. 3つの問題点

1) 野球留学

野球留学に関する質問項目は3つ。質問23「本人が望むなら越境入学に問題はないと思う」、質問33「有力な選手には学区外であっても入部してもらいたい」、質問42「積極的に自分自身がスカウト活動を行いたい」である。

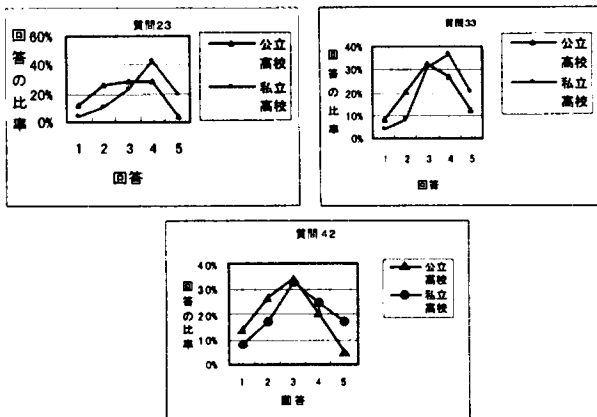


図 13. 野球留学に関する質問の学校区分による比較

野球留学に関する3つの質問項目を学校区分によって比較した。3つの質問とも私立高校が公立高校を上回り、私立高校の方が野球留学に対して肯定的であると言える。野球留学学生を受け入れている大半が私立高校であるという現状からもこの結果を推察できたが、今回の調査で明らかになった。

2) 不祥事

不祥事に関する項目は2つ。質問44「部員の不祥事でチーム全体の出場停止は厳しいと思う」、質問48「指導場面において殴ることもやむを得ない場合があると思う」である。

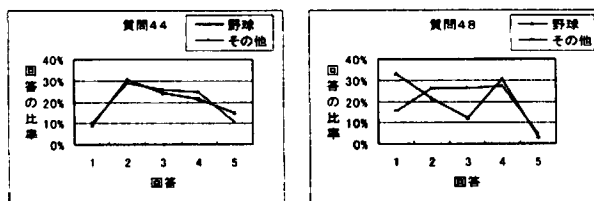


図 14. 不祥事に関する質問の経験種目による比較

次に不祥事に関する質問項目を経験種目によって比較した。野球を経験してきた監督者とその他の種目を経験してきた監督者との考え方の違いを比較しようと試みたが質問44「部員の不祥事でチーム全体の出場停止は厳しいと思う」についてはあまり違いが見られなかった。質問48「指導場面において殴ることもやむを得ない場合があると思う」では回答にばらつきが見られ、傾向を捉えるのは困難だと考えられる。

3) 女子選手

女子選手に関する項目は3つ。質問8「希望者がいれば女子生徒も部員として受け入れたい」、質問38「女子選手の公式戦出場を認めるべきである」、質問56「部内に女子選手がいたとしても男子同様に指導すると思う」である。

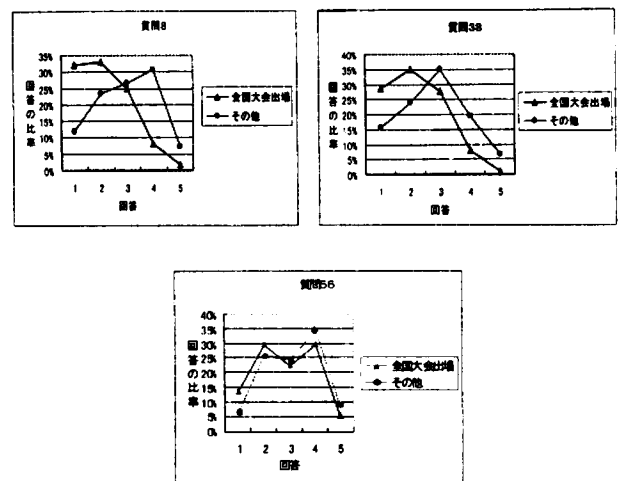


図 15. 女子選手に関する質問の監督としての最高成績による比較

女子選手に関する3つの質問項目を監督としての最高成績によって比較した。質問8「希望者がいれば女子生徒も部員として受け入れたい」については顕著に差が表れた。他の2つの質問項目についても全国大会に出場していない監督の方が肯定的であると言える。そして全国大会出場経験があり、競技レベルが高く、勝利志向が強い監督では逆に否定的な回答が得られた。これは目的で述べた推察通りの結果となった。

IV. 考察

1. 因子分析について

1) 年齢による因子得点の比較

第一因子「練習内容」、第四因子「全員参加・機会均等」、第五因子「生涯スポーツ」において、若いグループほど高い値を示していることがわかった。第一因子においては競技成績に大きく影響をもたらすことが考えられる質問項目であり、このことから若い指導者ほど、試合や大会において結果を求める傾向があると考えられる。

第四因子においては若い監督者ほど、女子選手容認の考えをもっており、練習においては自らの考えを押し付けるのではなく、自ら考え、実行してほしいと考えているようである。第五因子においては選手に卒業後もなんらかの形で野球には携わってもらいたいと考えており、自らは他の指導者と交流して、野球の発展を望んでいると考えられる。

2) 指導年数による因子得点の比較

第二因子「コミュニケーション」、第四因子「全員参加・機会均等」に有意差があり、第二因子においては16年以上グループが4年以下グループよりも高い値を示した。これは「コミュニケーション」因子を構成する項目が、他校の監督との交流・選手とのコミュニケーション、指導力には自信がある、などといったもので、年齢を重ねていくうちに培われる能力が影響しているのではと考えられる。

選手とのコミュニケーションについては指導年数を重ねていくうちにコミュニケーション能力が身につく、確立されていくと考えられる。他校の監督との交流は様々な経験を通して繋がる必要があると考えられる。指導力に関しても経験が大きく関わってくると推察され、経験を重ねた上で自らの指導力に自信を持つものと考えられる。第四因子においては4年以下のグループと5年以上15年以下のグループ、4年以下のグループと16年以上のグループに有意差が見られ、4年以下グループが他の2つのグループよりも高い値を示した。これは指導年数が浅い監督者ほど、女子選手容認の考えをもっており、練習においては自らの考えを押し付けるのではなく、自ら考え、実行してほしいと考えているようである。

3) 野球経験年数による因子得点の比較

第一因子「練習内容」、第二因子「コミュニケーション」、第三因子「指導・管理」、第五因子「生涯スポーツ」に有意差があり、野球経験年数が長ければ長いほど高い値を示していた。第一因子においては因子を構成する質問項目は、競技成績に大きく影響をもたらすことが考えられるものであり、自らの経験に基づいた考えであるといえる。第二因子では2年以下のグループと8年以上のグループに有意差が見られた。これは、自らが野球を続けて培われた経験を生徒にも同じように伝えたいという考えが見られる。野球経験の浅い監督者は野球に関する指導法に時間を費やし、コミュニケーションを取る余裕がないものと考えられる。第三因子ではすべてのグループごとに有意差が見られた。これは、野球経験が長い人ほど野球留学に関して肯定的であることが言える。また、受け入れた場合の選手の指導、管理にも力を注ぐものと考えられる。第五因子においては選手に卒業後もなんら

かの形で野球には携わってもらいたいと考えており、自らは他の指導者と交流して、野球の発展を望んでいると考えられる。これは年齢別でも同じ傾向が見られたが、自らが野球を経験し、監督者となった立場から野球に携わることに何らかの意義を見つけているものと考えられる。

4) 学校区分による因子得点の比較

公立高校と私立高校に分類して因子ごとにt検定を実施した。有意差が見られたのは第一因子「練習内容」、第二因子「コミュニケーション」、第三因子「指導・管理」、であり、3因子すべてにおいて私立高校が公立高校より高い値を示した。第一因子を構成する質問項目は、競技成績に大きく影響をもたらすことが考えられるものであり、このことから公立高校に比べ、私立高校は勝利志向が強いと見ることができる。第二因子においても私立高校の方が公立高校に比べ、コミュニケーションが重要だと感じながら指導に当たっていると考えられる。第三因子は選手を管理する質問項目と野球留学に関しての質問項目で構成されており、私立高校は公立高校に比べ、野球留学に関して肯定的であることが言え、選手の指導、管理にも力を注ぐものと考えられる。このことは、問題点で指摘した通りの結果が得られた。

5) 職種区分による因子得点の比較

教員とその他に分類して因子ごとにt検定を実施した。第二因子において教員がその他の職業と比べ高い値を示した。これは教員という立場から、部活動だけでなく、普段の学校生活において部員と接する機会が多く、コミュニケーションを取りやすい環境にあるからだと考えられる。

6) H16年夏季大会成績による因子得点の比較

全国大会出場とその他に分類して因子ごとにt検定を実施した。有意差が見られたのは第二因子「コミュニケーション」、第三因子「指導・管理」においては全国大会出場監督者がその他の監督者より高い値を示し、第四因子「全員参加・機会均等」、第八因子「活動環境」ではその他の監督者が全国大会出場監督者より高い値を示した。第二因子において考えられることは、競技成績において監督者のコミュニケーション能力に繋がりがあると考えられる。第三因子においては全国大会出場時に実際に野球留学生が在籍していたため、このような結果が出たものと考えられる。第四因子においてその他の監督者は、全国大会出場監督者よりも女子選手に対し柔軟な姿勢であり、練習においても自主性を重んじる傾向であると考えられる。第八因子においてはその他の監督者が現在の活動環境に不満を感じていると考えられる。そして選手のウエイトトレーニングについても必要性を感じていると考えられる。

7) 監督最高成績による因子得点の比較

全国大会出場とその他に分類して因子ごとにt検定を実施した。有意差が見られたのは第二因子「コミュニケーション」、第三因子「指導・管理」であり、全国大会出場経験のある監督者がその他の監督者より高い値を示した。第四因子「全員参加・機会均等」、第八因子「活動環境」においては全国大会出場経験のない監督が全国大会出場経験のある監督より高い値を示した。第二因子において全国大会出場経験のある監督者が高い値を示したことからコミュニケーションが競技成績にとって有用であると考えられる。第三因子においても全国大会出場監督者が高い値を示し、野球留学に関して肯定的であることが言え、選手の指導、管理にも力を注ぐものと考えられる。反対に第四因子においてはその他の監督者の方が高い値を示した。これは女子選手に対し柔軟な姿勢であり、練習においても自主性を重んじる傾向であると考えられる。第八因子においてもその他の監督者がより高い得点を示している。これはその他の監督者現在の活動環境に不満を感じていると思われる。

8) 経験種目による因子得点の比較

野球とその他に分類して因子ごとにt検定を実施した。有意差が見られたのは第一因子「練習内容」、第二因子「コミュニケーション」、第三因子「指導・管理」、第五因子「生涯スポーツ」でありすべて野球経験者の方が他種目経験者に比べて高い値を示した。第一因子においてはこの因子を構成する質問項目に野球に関する質問項目もあるため有意な差が出たものと考えられる。第二因子においては野球以外の種目を経験してきた監督者にとって野球の指導力に関して自信が持ていないため、このような差がでたと考えられる。第三因子においては野球以外の種目を経験してきた監督者にとって野球留学について否定的であると考えられる。第五因子についても野球経験のある監督者の方が高い値を示した。これは、野球以外の種目を経験してきた監督者にとっては野球に携わることについての価値を見出せていないものと考えられる。

9) 競技者時代の最高成績による因子得点の比較

全国大会出場とその他に分類して因子ごとにt検定を実施した。有意差がみられたのは第一因子「練習内容」、第二因子「コミュニケーション」、第三因子「指導・管理」であり、すべてにおいて全国大会経験者の方が他よりも高い値を示した。第一因子においては、全国大会出場経験のある監督は練習内容を改善、整えることで競技成績が向上するとの考えが強いと考えられる。第二因子においては、全国大会出場経験のある監督者はコミュニケーションが重要であると思いつつながら指導に当たっていると考えられる。第三因子においては野球留学に対し柔軟な

姿勢であると考えられ、選手の指導、管理にも力を注ぐものと考えられる。

2. 自由記述について

1) 「監督になった理由・経緯」

一番多くの意見が出たのは「野球が好き・続けたい」というものであった。これは野球を経験してきて、これからも何らかの形で野球を続けたい、関わってみたい、という気持ちから監督者になった人が多いことがわかる。次に多く挙げられた「校務」では、ほとんどの監督者が教員であることから、希望しようがしまいが引き受けなければならなかったことを示している。薦(1983)は「高校野球では、野球の技術を教えるだけが目的ではない。技術より先に必要なことがある。それは、人間を鍛えるということだ。」と述べている。「人間形成・教育の一環」について、この項目についての解答した監督者は薦と同様に、野球を通して社会に通用する人間を育てようという考えをもって指導に当たっていると考えられる。

2) 「現在の高校野球指導者にとって最も大切なこと」

一番多く出されたものは「人間形成・教育の一環」であった。これは、監督者のほとんどがその学校の教員であることから、その立場からしても高校野球は教育の一環であり、野球を通して社会に通用する人間を育てようという考えを持ちながら部活指導に当たっているであろう。野球を指導することによって、選手たちには一人の人間として成長して欲しいとの願いが込められていると考えられる。

次に「野球が好き・情熱」と続いた。これは「監督になった理由・経緯」でも多く出された内容である。野球が好きであること、野球に対して情熱を持っていることで指導が充実したものになるとの考えを持って指導に当たっているであろう。

ほぼ同数の意見として、「自己向上」が挙げられた。自らを高めることをしなければ満足な指導はできないとの考えがあり、選手以上に自らを律する姿勢が見て取れる。

3) 「これから高校野球指導者を目指す者に望むこと」

この質問に対しての回答では「現在の高校野球指導者にとって最も大切なこと」と同じような傾向が見られた。このことは現在指導に当たっていて感じるものが、そのままこれから指導者を目指す者に望むことに繋がっていると考えられる。高校野球の指導者にとって大切なことは、今指導に当たっている監督者も、これから目指す者にとっても変わらず同じであるという考えであろう。

V. まとめ

表 15. 監督およびチームの特性による因子得点の比較一覧表

	練習内容	コミュニケーション	指導・管理	全員参加・機会均等	生涯スポーツ	指導方針	サポート	活動環境
年齢	1>2>3	—	—	1>2,3	1>2>3	—	—	—
指導年数	—	1<3	—	1>2,3	—	—	—	—
野球経験年数	1<2,3	—	1,2<3	—	1<3	—	—	—
学校種	私立>公立	私立>公立	私立>公立	—	—	—	—	—
環境	—	—	—	—	—	—	—	—
H16年夏季大会成績	—	全国>その他	全国>その他	全国>その他	—	—	—	その他>全国
H18年野球大会成績	—	—	—	—	—	—	—	—
監督としての最高成績	—	全国>その他	全国>その他	全国>その他	—	—	—	その他>全国
指導科目	野球>その他	野球>その他	野球>その他	—	野球>その他	—	—	—
競技者としての最高成績	全国>その他	全国>その他	全国>その他	—	—	—	—	—

年齢、指導年数、野球経験年数は若い方から1, 2, 3とした。成績に関する項目については全国大会出場を全国、それ以外をその他とした。—は有意差の発見なかった項目である。

因子得点の比較について全体を見てみると似た傾向を示す監督およびチームの特性がある。野球経験年数、経験種目ではどちらも第一因子「練習内容」、第二因子「コミュニケーション」、第三因子「指導・管理」、第五因子「生涯スポーツ」に有意差が見られた。野球経験年数では長ければ長いほど高い値を示し、経験種目では野球を経験している監督の方が高い値を示していた。これらの因子に影響を及ぼしているのは野球経験の有無であることがわかる。

学校区分と競技者時代の最高成績でも同様の傾向が見られた。第一因子「練習内容」、第二因子「コミュニケーション」、第三因子「指導・管理」に有意差が見られ、学校区分では私立高校、競技者時代の最高成績では全国大会出場経験のある監督者がすべてにおいて高い値を示した。最近の全国大会出場校で見ると、第87回全国高等学校野球選手権大会では49校中29校、第88回大会では30校と私立高校が過半数以上を占めている。このことから私立高校の方が公立高校に比べ、競技力が高いと考えられる。したがってこれらの因子は競技水準に関連していることがわかる。

H16年夏季大会成績と監督最高成績でも同じ傾向が見られる。第二因子「コミュニケーション」、第三因子「指導・管理」では、どちらも全国大会出場経験のある監督者が高い値を示し、第四因子「全員参加・機会均等」、第八因子「活動環境」においては全国大会出場経験のない監督者が高い値を示した。これらの因子も競技水準に関連しているものと考えられる。競技水準が低い方の監督は環境への不満を持っていたり、機会均等などの教育的配慮を強く行っていると考えられる。

これらの分類により因子得点の比較を行った結果、全体的に高い値を示した因子は「生涯スポーツ」因子、「指導方針」因子、「練習内容」因子であった。第二因子の「コミュニケーション」に関してはほとんどの分類において有意差が見られた。このことは「コミュニケーション」の取り方、必要性などそれぞれの監督者にとって様々な考え方があのだと考えられる。

VI. 参考・引用文献

- 江刺正吾・小椋博 (1994) 高校野球の社会学—甲子園を読む—。世界思想社。
- 藤井利香 (2003) 監督と甲子園。日刊スポーツ出版社。
- 藤井利香 (2004) 監督と甲子園2。日刊スポーツ出版社。
- 久保田高行 (1964) 高校野球百年。時事通信社。
- 功力靖雄 (2000) 野球部監督の指導理念等に関する一考察—中学と高校野球の比較から—。筑波大学体育科学系紀要, 23: 1-12。
- 松尾俊治 (1984) 不滅の高校野球 栄光と感激のあと 上 草創期～昭和29年。ベースボール・マガジン社。
- 松尾俊治 (1984) 不滅の高校野球 栄光と感激のあと 下 昭和30年～昭和58年。ベースボール・マガジン社。
- 松尾俊治 (1992) 不滅の高校野球 栄光と感激のあと 昭和30年～平成4年。ベースボール・マガジン社。
- 森岡浩 (2001) 県別全国高校野球史。東京堂出版。
- 中村靖 (1991) 高校野球指導者の理念に関する研究 (I・II) —東京都高野連競技レベル別比較—。関西外国語大学研究論叢, 54: 441-455。
- 澤井和彦 (2001) 時代を映すスポーツ人物・考 (20) 高校野球と東京六大学野球リーグにおける女性選手の参加問題—社会システム理論による把握の試み—。体育の科学, 51 (11): 901-906。
- 関川弘夫 (1997) 想いは熱き甲子園。新潟日報事業者。
- 清水諭 (1998) 甲子園のアルケオロジー—スポーツの「物語」・メディア・身体文化—。新評論。
- 薦文也 (1983) 攻めダルマの教育論。こま書房。
- 飛田穂州 (1972) 飛田穂州の高校野球入門—攻撃編・練習編—。
- 横井康博・守能信次 (1997) 高校野球の持つ価値と問題性に関する一考察。中京大学体育学論叢, 38 (2): 45-52。